

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第三十九回）

ふじはら

つか

藤原の 大宮仕へ 生れつく

をとめ

とも

や 娘子がともは 羨しきろ

かも

卷一—53

右の歌は、作者いまだ詳らかにあらず。

（解説）生まれつき藤原の大宮に宮仕えするものとしてこの世に生まれて来た娘子たちはうらやましい限りだ。

・この歌は藤原の宮に仕える娘子への羨望の念を詠うことで藤原宮を讃えた歌といわれる。

・藤原京は持統女帝（第四十代天皇）が中国の都城を参考にし奈良盆地の南端部に造営されたものでその建築様式は大陸風で、その規模は壮大なものであった。

・藤原の宮跡は近鉄線の八木駅と耳成駅の間で、大和三山（香久・畝傍・耳成）に囲まれていてその三山の一つ耳成山の真北1・5キロほどに、木のよく茂った土壇が残している。ここが藤原宮・大極殿の跡（奈良

たかどの
県檀原市高殿町）であり持統天皇八年（六九四）十二月
に明日香にあった浄御原宮きよみはらからこの地に都が移り、文
武天皇をへて元明天皇の和同三年（七一〇）と三代、十
六年間に亘り都が営まれた。

（参考文献）新潮日本古典集成「萬葉集」 犬養孝著「万葉の旅」

高城修二著「神々と天皇の宮都をたどる」等

（写生地）藤原京大極澱跡付近から北にそびえる大和
三山の一つ耳成山（139・7m）を描く。（池田杏花）

